

若年層と中年層の自尊感情に影響する要因についての比較・検討

—組織内自尊感情に着目して—

教育心理学コース 林 彰子

Comparison and examination of factors affecting self-esteem between young adults and middle-aged individuals

—Focusing on organization-based self-esteem—

Shoko HAYASHI

This investigation explores the factors that affect the self-esteem of working adults divided into two age groups (20-44 and 45-69). The effect of organization-based self-esteem (OBSE) is focused on and examined with occupational prestige (OP) and anxiety, which are considered factors that affect self-esteem. The regression analysis revealed that OBSE alone predicted young people's self-esteem (20-44) and that three factors, OBSE, OP, and anxiety about the inner self, predicted that of middle-aged people (45-69). The middle-aged group showed higher self-esteem than the young one. The results show that the self-esteem of young people is greatly supported by OBSE, whereas self-esteem in middle age is well supported by both OBSE and OP despite being negatively affected by anxiety about one's own personality, emotions, and interpersonal relationships. The result suggests that middle age is a time to review their relationships with the people around them and reconsider their roles not only in their workplace but also in society with a wider view, which may support them in maintaining their self-esteem rather high.

目次

1. 背景および研究目的

- A. 自尊感情
- B. 日本人の青年期以降の自尊感情
- C. 組織内自尊感情と職業威信
- D. 不安
- E. 目的

2. 方法

- A. 研究協力者
- B. 手続き

3. 結果

- A. 統計量比較
- B. 相関分析
- C. 重回帰分析

4. 考察

1. 背景および研究目的

A. 自尊感情

自尊感情は自己に対する肯定的または否定的な態度で、他者に対する優越感と自己に対して「これでよい」と思う自己受容の二つの側面があり、特に自己受容は

個人の well-being に影響するメンタルヘルスを保つ重要な要素となる (Rosenberg, 1965)。自尊感情が適切に保持されると、ストレスを受けても心理的・身体的症状は減少する (DeLongis, Folkman & Lazarus, 1988 他)。

欧米の研究では、自尊感情は成人期に入ると上昇し始め、50歳前後でピークとなり、老年期で急下降するという報告がある (Orth, Robins & Widaman, 2012他) が、日本人についての研究では、老年期になっても自尊感情の急下降は見られない。Ogihara (2019) は、人は老年期になると遠慮深くなり自分を卑下して自尊感情が低下する傾向を示すが、日本人は謙虚で自尊感情がもともと低いということがこの現象に関係していると考察している。ローゼンバーグ自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) を用いた OECD 諸国を含む53か国の調査において日本人の自尊感情得点が最下位であった (Schmitt & Allik, 2005) ことから、それは理由の一つと考えられる。

B. 日本人の青年期以降の自尊感情

日本人の自尊感情を年代別に比較したものとして、1980-2013年に心理学査読誌に掲載された文献256研究

の自尊感情平均値を検討した小塩・岡田・茂垣・並川・脇田 (2014) の報告が挙げられる。これによると、成人 (18-60歳) が最も自尊感情が高く、年齢が下がるほど自尊感情は低下した。15歳から86歳までの自尊感情と理想-現実自己のズレの関連性を調査した松岡 (2006) の研究では、理想-現実自己のズレが青年期後期 (20歳前後) 以降に年齢と共に減少していくことが、それ以降の自尊感情の上昇 (55-64歳でピーク)・維持と関連があり、80代でも自尊感情は十分に維持されていることを示した。日本人英語教師を対象にした Hayashi (2021) の研究でも、20代の教師の自尊感情が最も低く、40・50代教師の自尊感情得点は20・30代教師より有意に高いことが示された。20代教師においては、自信がある英語知識・技能は彼らの自尊感情を予測しなかったが、40・50代教師では自信がある英語知識・技能が彼らの自尊感情を予測し、理想-現実自己のズレが年齢と共に減少することが自尊感情を保持する一因になっているという松岡 (2006) の報告を支持した。また、自らが得意とする英語知識・技能を活かした授業スタイルを確立している教師は自尊感情が保持できる (林, 2020) ということも報告されており、これは、経験を重ねることにより、組織の成員 (教育者) として自己を有能で価値ある重要な存在 (教師) であると捉える度合いである「組織内自尊感情」(Pierce, Gardner, Cummings & Dunham, 1989) の上昇と関連があると考えられる。

C. 組織内自尊感情と職業威信

組織内自尊感情とは、職場での自己を「有能で価値ある重要な存在である」と捉える度合いである。これは、自己全体に対する一般的な自尊感情とは異なる独立した変数であり、自尊感情を含む自己評価や仕事の複雑性と関連を示す (Pierce & Gardner, 2009)。欧米・日本におけるいずれの研究でも、組織内自尊感情と自尊感情は高い正の相関を示した (Matsuda, Pierce & Ishikawa, 2011; Pierce, et al., 1989)。さらに、組織内自尊感情は従業員の well-being を向上させ、組織内自尊感情が高い従業員は自己の能力に対する評価が高く、その能力を活かして自らが設定した目標を達成するためのワーク・エンゲイジメントも高いことが報告されている (松田・石川, 2012)。このように、これまでの先行研究では、組織内自尊感情を高く保つことが、自尊感情、幸福度、ワーク・エンゲイジメントを高く保つなどのポジティブな影響を就業者に及ぼすことが報告されていることから、仕事を持つ成人の自尊感情

を支える重要な要因として、組織内自尊感情に着目する。

本研究では、就業者の自尊感情に関わるものとして、自分の職業が世間一般からどのように評価されているかという、職業の社会的地位にも着目した。これは、自分の職業の客観的職業威信を測定する職業威信尺度の2つの下位尺度「社会的地位」「社会的責任」のうちの1つである (上瀬・下村・今野・堀・岡本, 2005)。職場内の自身の評価である組織内自尊感情が低くても、職業の客観的な地位の高さが就業者の自尊感情に正の影響を与える可能性があるため、本研究では、自分の職業に誇りを持つことと関連する職業威信 (社会的地位) についても検討する。

D. 不安

不安は、自己効力感と密接に関連する複雑な情緒的反応である (Izard, 1972他)。自己効力感とは、人がある事態に対処するとき、結果を生み出すのに必要な行動を自分がどのくらい効果的に行うことができるかという確信の程度 (Bandura, 1977) を指し、行動に対する確信の向上は、自信の向上と不安の低減をもたらす。教師研究においても、英語技能・知識に自信がある英語教師は授業に対して不安が少なく、自尊感情が高く保たれていることが示唆された (林, 2020)。不安の低減は自尊感情の維持・向上に関わることから、不安は自尊感情に負の影響を及ぼす要因の一つと考えられる。

本研究では、若本・無藤 (2004) が、中年期の変化によって喚起される自己に対する広範囲な関心・評価を因子分析して抽出した「自己評価尺度」の4領域16項目を使用した。4領域は、社会や職場における自分の立場や役割に関すること (社会的自己)、自分自身の性格・情緒や周りの人との付き合いなど人間関係に関すること (内的自己)、知性や容姿の衰えに関すること (身体的自己)、実際に生活するにあたり必要となる体力や経済状態に関すること (生活的自己) となっている。これらは40代から60代を対象とした分析から作成された項目だが、就職、結婚などのライフイベントを経験するであろう青年期後期以降の成人の不安を広範囲に網羅していると考えられるため、本研究における不安の程度を測定する尺度として使用した。

E. 目的

これまでの研究では、欧米・日本の会社・組織全体において、就業者の自尊感情と組織内自尊感情の強い

連関は報告されてきたが、組織内自尊感情が自尊感情に及ぼす影響は年代別に検討されてこなかった。そこで、本研究では、就業者を若年層と中年層（ベテラン群）の2つの群に分けて比較・検討する。就業者の自尊感情をもっとも大きく支えていると考えられる組織内自尊感情に着目し、自尊感情に影響すると考えられる職業威信（社会的地位）と不安を含め、自尊感情を予測する要因について年齢層別に検討し、50～60代の自尊感情が、若年層よりも高く保たれている一因を探ることを目的とする。

なお、本研究では、常勤（フルタイム）・非常勤（パートタイム）を問わず就業している成人を対象とし、厚生労働省（2000）の年齢区分¹⁾や、主に女性が更年期を意識し始め、症状が出てきたと感じるのが45歳からであるという菅沼・串間・宮里（2000）の研究を参考に、45-69歳を中年期・中年層²⁾、20-44歳を若年層と区分することとした。

仮説は以下の3つである。

仮説1：就業者の自尊感情と組織内自尊感情が強い連関を持つことから、若年層・中年層の両方において、「組織内自尊感情」が自尊感情を予測するもっとも大きい要因である。

仮説2：就業年数が少ない若年層においては、「社会的自己」に対する不安が自尊感情を予測する負の要因となる。

仮説3：中年層では、積み重ねた経験から仕事に対する自信があるため、高い「組織内自尊感情」が自尊感情を支える主要因となっており、「職業威信」は自尊感情を予測しない。

2. 方法

A. 研究協力者

研究協力者は、筆者の高校・大学・教員時代の同級生、知人などに協力と拡散を依頼し、縁故法と雪だるま式標本法で募集した。その結果、313名（平均年齢43.06歳、 $SD=12.27$ 、男性168名、女性140名、無回答5名、若年層112名、中年層201名）が研究に参加・協力した（表1）。

表1 協力者の年齢性別人数

変数	出現値	性別			合計
		男	女	無回答	
年齢	20代	16	26	0	42
	30代	29	11	1	41
	40-44	14	15	0	29
	45-49	29	22	1	52
	50-54	48	37	2	87
	55-59	18	21	1	40
	60-64	12	8	0	20
	65-69	2	0	0	2
	合計	168	140	5	313

B. 手続き

ウェブを用いたアンケートにて、無償の質問紙調査を実施した。追加調査に協力をしても良いと答えた協力者以外は無記名とした。質問紙には以下の項目を記載し、分析対象とした。

(1) 個人に関する質問：「年齢（20代、30代、40：40-44歳、45：45-49歳、50：50-54歳、55：55-59歳、60：60-64歳、65：65-69歳）」「性別（男/女/回答しない）」「学歴（大卒以上/大卒未満）」「世帯年収（1：0-199万円、2：200-399万円、3：400-599万円、4：600-799万円、5：800-999万円、6：1000万円以上）」「生活を共にするパートナー（いない：0、いる：1）」「子ども（いない：0、いる：1）」、「職種（専門職、技術職、事務・管理職、販売職、サービス職、経営、その他：記述回答）」

(2) 自尊感情尺度：Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成、1982）を基に、日本の研究では整合性が低いいため省かれることが多い「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい（I wish I could have more respect for myself.）」という項目を筆者が改訂し、「自分自身に対する尊敬・尊重の気持ちがないと思う」を用いて10項目とした（4件法・計40点）。逆転項目は処理し、得点が高いほど自尊感情が高いことを意味する（ $N=308$, $\alpha=.895$ ）。

(3) 不安（4領域16項目、5件法）：社会的自己（「社会的立場」「仕事」「役割」、計15点、 $\alpha=.852$ ）、内的自己（「情緒」「性格」「人間関係（職場などの人間関係）」「家族・親族（身内の人間関係）」、計20点、 $\alpha=.816$ ）、身体的自己（「知性」「性的能力」「肌」「容貌」

「体型」, 計25点, $\alpha=.760$), 生活的自己(「体力」「健康状態」「経済状態」「生活」, 計20点, $\alpha=.808$)について, どの程度不安に感じるかどうかを尋ねた。得点が高いほど不安が高いことを意味する。

(4) 組織内自尊感情: Pierce他(1989)が作成したOBSE(10項目)をMatsuda他(2011)が翻訳・検討した日本語版「組織内自尊感情」(「私は職場で必要とされている」「私は職場で役に立つ」など8項目, 5件法・計40点)を使用した。得点が高いほど組織内自尊感情が高いことを意味する(N=295, $\alpha=.908$)。

(5) 職業威信: 下位尺度である社会的地位に関する9項目(「社会の発展に寄与する」「社会的地位が高い」など, 4件法, 計36点)を使用した。得点が高いほど「職業威信」が高いことを意味する(N=293, $\alpha=.860$)。

統計分析には, Excelで動くHAD17.0を使用した(清水, 2016)。若年層・中年層の各変数の比較にはt検定を行い, 相関分析で自尊感情と相関を示した変数を用いて, 若年層・中年層それぞれの自尊感情を予測する変数を検討するために重回帰分析を行った。欠損のあるデータは削除して分析した。

3. 結果

A. 統計量比較

若年層(平均年齢28.8歳)と中年層(平均年齢50.9歳)の各変数の平均点の差を調査するために, t検定を行った。

デモグラフィック変数に関しては, 教育歴(どちらの群とも80%以上が大卒以上)には有意差が見られなかったが, 世帯年収(若年層3.96, 中年層4.90), パートナーの有無(若年層.53, 中年層.83), 子どもの有無(若年層.35, 中年層.69)については, 中年層の方が若年層よりも統計的に有意に高かった(すべて $p<.01$)。職種は, 多い順に事務・管理職(113名), 専門職(90名), 技術職(46名), サービス職(23名), 販売業(14名), 経営(7名), 営業(2名)となり, 若年層と中間層の間に有意差は見られなかった。

自尊感情の平均点は若年層27.43点, 中年層30.40点($p<.01$), 組織内自尊感情は若年層27.36点, 中年層30.88点($p<.01$)で有意差が見られ, いずれも年齢と共に上昇した(図1・図2)。各不安と職業威信に関しては, 平均点に有意差は見られなかった。(表2)

表2 若年層・中年層別の各変数の平均値

変数名	有効N (若年)	(中年)	平均値 (若年)	(中年)
自尊感情**	111	197	27.432	30.401
年齢	111	197	28.829	50.863
性別	111	197	1.468	1.447
教育歴	110	192	0.818	0.797
世帯年収**	110	192	3.955	4.896
パートナー**	110	197	0.527	0.827
子ども**	111	197	0.351	0.685
社会的自己	111	197	9.946	8.802
内的自己	111	197	11.766	11.137
身体的自己	111	197	15.315	15.071
生活的自己	111	197	12.180	12.036
組織内自尊感情**	105	192	27.362	30.875
職業威信	105	192	23.695	23.568

若年層/中年層で有意差があるもの ** $p<.01$

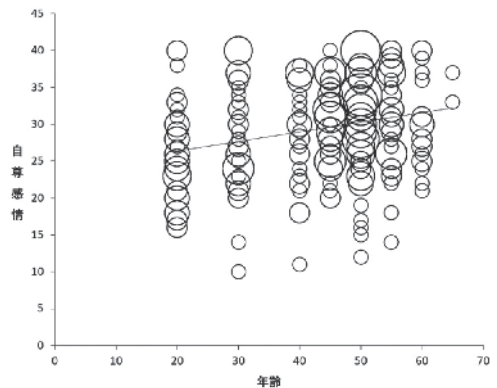


図1 年齢別自尊感情得点

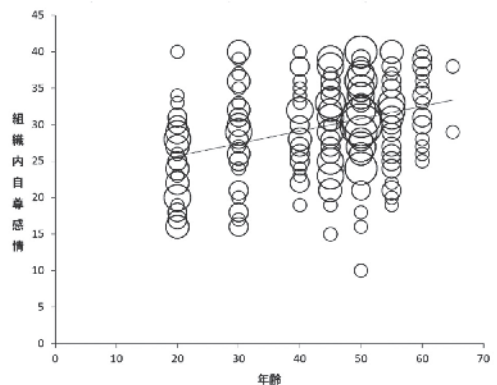


図2 年齢別組織内自尊感情得点

B. 相関分析

次に、相関分析を行って自尊感情と相関のある変数を確認し、重回帰分析で用いる独立変数を決定した。

若年層では、組織内自尊感情 ($r=.617, p<.01$)、内的自己 ($r=-.535, p<.01$)、社会的自己 ($r=-.449, p<.01$)、身体的自己 ($r=-.389, p<.01$)、生活的自己 ($r=-.352, p<.01$)、職業威信 ($r=.329, p<.01$)、性別 ($r=-.322, p<.01$)、世帯収入 ($r=.232, p<.05$)、年齢 ($r=.190, p<.05$) だった (表3)。

一方、中年層では、内的自己 ($r=-.528, p<.01$)、組

織内自尊感情 ($r=.510, p<.01$)、生活的自己 ($r=-.477, p<.01$)、職業威信 ($r=.455, p<.01$)、身体的自己 ($r=-.400, p<.01$)、社会的自己 ($r=-.370, p<.01$)、パートナー ($r=.194, p<.01$)、子ども ($r=.167, p<.05$)、世帯収入 ($r=.155, p<.05$) だった (表4)。

これにより、年齢、性別、世帯年収、パートナー、子ども、4領域全てに対する不安(社会的自己、内的自己、身体的自己、生活的自己)、組織内自尊感情、職業威信を重回帰分析で用いる独立変数とした。

表3 若年層における変数間の相関

	自尊感情	年齢	性別	教育歴	世帯年収	パートナー	子ども	社会的自己	内的自己	身体的自己	生活的自己	組織内自尊感情	職業威信
自尊感情	1.000												
年齢	.190 *	1.000											
性別	-.322 **	-.112	1.000										
教育歴	-.042	-.076	-.073	1.000									
世帯年収	.232 *	.404 **	-.190 *	.011	1.000								
パートナー	.143	.541 **	-.198 *	.022	.509 **	1.000							
子ども	.105	.634 **	-.124	-.054	.429 **	.688 **	1.000						
社会的自己	-.449 **	-.254 **	.010	-.039	-.085	-.137	-.081	1.000					
内的自己	-.535 **	-.162 +	.219 *	-.090	-.150	-.185 +	-.086	.546 **	1.000				
身体的自己	-.389 **	-.258 **	.174 +	-.306 **	-.080	-.132	-.197 *	.459 **	.623 **	1.000			
生活的自己	-.352 **	-.023	-.030	-.099	-.070	-.007	-.015	.501 **	.594 **	.475 **	1.000		
組織内自尊感情	.617 **	.301 **	-.245 *	-.166 +	.227 *	.310 **	.282 **	-.360 **	-.327 **	-.195 *	-.147	1.000	
職業威信	.329 **	-.192 *	-.119	.151	.071	-.077	-.098	-.227 *	-.161	-.126	-.208 *	.392 **	1.000

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

表4 中年層における変数間の相関

	自尊感情	年齢	性別	教育歴	世帯年収	パートナー	子ども	社会的自己	内的自己	身体的自己	生活的自己	組織内自尊感情	職業威信
自尊感情	1.000												
年齢	.029	1.000											
性別	-.114	-.002	1.000										
教育歴	.114	-.117	-.280 **	1.000									
世帯年収	.155 *	-.050	-.278 **	.393 **	1.000								
パートナー	.194 **	.152 *	-.184 **	.017	.420 **	1.000							
子ども	.167 *	.053	-.095	-.005	.215 **	.385 **	1.000						
社会的自己	-.370 **	-.109	.034	-.031	-.063	-.037	-.090	1.000					
内的自己	-.528 **	-.007	.107	-.121 +	-.085	-.160 *	-.151 *	.638 **	1.000				
身体的自己	-.400 **	-.053	.131 +	-.150 *	.009	-.002	.022	.355 **	.473 **	1.000			
生活的自己	-.477 **	-.097	.118 +	-.152 *	-.191 **	-.136 +	.022	.479 **	.499 **	.617 **	1.000		
組織内自尊感情	.510 **	.115	-.135 +	.096	.102	.178 *	.135 +	-.184 *	-.292 **	-.241 **	-.337 **	1.000	
職業威信	.455 **	.017	-.232 **	.167 *	.269 **	.155 *	.193 **	-.152 *	-.230 **	-.162 *	-.232 **	.429 **	1.000

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

C. 重回帰分析

若年層・中年層の自尊感情と相関が見られた変数を全て投入して、若年層・中年層それぞれについて「自尊感情」を従属変数とする重回帰分析を行った。

若年層で自尊感情を予測したのは、「組織内自尊感情」($\beta=.454, p<.01$)のみとなった。「内的自己」($\beta=-.197, p<.10$)、「性別」($\beta=-.140, p<.10$)は有意傾向を示した(表5)。

中年層で自尊感情を予測したのは、「組織内自尊感情」($\beta=.255, p<.01$)、「内的自己」($\beta=-.255, p<.01$)、「職業威信」($\beta=.219, p<.01$)となった。「生活的自己」($\beta=-.152, p<.10$)は有意傾向を示した(表6)。

表 5 若年層の自尊感情を予測する要因 (N=104)

変数名	自尊感情	95%下限	95%上限	VIF
年齢	.060	-0.144	0.265	2.143
性別	-.140 +	-0.293	0.014	1.210
世帯年収	.097	-0.076	0.271	1.545
パートナー	-.087	-0.302	0.127	2.367
子ども	-.088	-0.301	0.125	2.324
社会的自己	-.093	-0.286	0.100	1.910
内的自己	-.197 +	-0.421	0.028	2.589
身体的自己	-.099	-0.290	0.092	1.869
生活的自己	-.048	-0.245	0.148	1.984
組織内自尊感情	.454 **	0.274	0.634	1.661
職業威信	.044	-0.129	0.216	1.520
R^2	.545 **			

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 6 中年層の自尊感情を予測する要因 (N=193)

変数名	自尊感情	95%下限	95%上限	VIF
年齢	-.006	-0.112	0.101	1.063
性別	.014	-0.098	0.126	1.172
世帯年収	-.003	-0.126	0.120	1.420
パートナー	.045	-0.083	0.174	1.542
子ども	.062	-0.055	0.180	1.296
社会的自己	-.023	-0.166	0.119	1.899
内的自己	-.255 **	-0.407	-0.103	2.160
身体的自己	-.089	-0.229	0.051	1.835
生活的自己	-.152 +	-0.304	0.001	2.175
組織内自尊感情	.255 **	0.133	0.376	1.381
職業威信	.219 **	0.097	0.341	1.399
R^2	.504 **			

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4. 考察

本研究は、就業者の組織内自尊感情に着目し、若年層と中年層に分けて、それぞれの自尊感情に影響する要因を比較・検討することを目的とした。その結果、若年層では組織内自尊感情が、中年層では組織内自尊感情、(内的自己に対する)不安、職業威信(社会的地位)の3つの要因が自尊感情を予測し、仮説1は若年層についてのみ支持され、仮説2,3も共に支持されず、筆者の仮説は概ね逆の結果となった。

デモグラフィック変数について2つの群で差異が見られたものは、世帯年収、パートナー・子どもの有無であった。若年層(平均年齢28.8歳)は、半数がパートナーを持たず、子どもがいる世帯は35%だった。一方、中年層(平均年齢50.9歳)は、80%以上がパートナーと生活を共にし、子どもがいる世帯は約70%だった。若年層の世帯収入がおよそ500-600万円、中年層

はおよそ700-800万円だったが、若年層の半数が一人世帯だったことから、両群とも、多くの協力者(または世帯)は、厚生労働省(2022)の調査³⁾で見られた平均所得と概ね同等の収入があったと考えられる。協力者の職種は両群で有意差は見られず、どちらの層も、大多数が平均から平均以上の収入が得られる職種に就いていたと言える。

自尊感情と組織内自尊感情の平均点については、ともに中年層が若年層よりも統計的に有為が高く、年齢と共に緩やかな上昇を示した。自尊感情と相関を示した変数を見ると、若年層においては、組織内自尊感情が最も高い正の相関を示し、内的自己に対する不安を筆頭に4領域の不安が負の相関を見せ、その後に職業威信が続き、正の相関を示した。一方、中年層では内的自己に対する不安が最も高い負の相関を示し、次に組織内自尊感情、生活的自己(負の相関)、職業威信と続いた。若年層とは異なり、パートナーや子どもの存在も自尊感情と正の相関を示した。また、中年層では男女間で自尊感情得点に有意差はなかったが、若年層においては、女性は男性よりも有意に低かった。

本研究の結果、中年層、若年層の自尊感情を予測する要因には差異があることが明らかになった。若年層においては、組織内自尊感情が今回取り上げた要因全体の影響の半分近く(45.4%)を占めており、若年層の自尊感情は、組織内自尊感情が高く保たれていれば不安による負の影響を受けづらいことが示唆された。一方、中年層においては、組織内自尊感情と、「情緒」「性格」「人間関係(職場などの人間関係)」「家族・親族(身内の人間関係)」に対する不安が同程度に自尊感情を予測したが、「職業威信」も正の影響を示し、不安の影響を受けているにも関わらず、自尊感情は若年層よりも高く保持されていた。

中年期の自尊感情は、組織内自尊感情だけではなく、自らの職業が「社会の発展に寄与」し、「社会的地位が高い」と評価されていると自認していることに支えられていることが示唆された。中年期では、次世代へ深い関心を持つてはごく子育てしていくという意識(岡本, 2007)や、近づきつつある老年期のアイデンティティを支える感覚の一つである、これまでやり遂げてきた仕事や次世代が立派に育っているという意識(Erikson, Erikson & Kivnick, 1986)が重要性を帯びてくるため、自分のことだけでなく、周囲や社会のことに広く目を向けるようになると考えられる。さらに、中年期は、多くの人が家族内や職場などでの役割や関係性の変化を経験する時期でもあるため(岡本,

2007), 周りの人との関係性や社会での自分の役割を見直す時期であるとも言える。すなわち, 45歳以降の中年期の自尊感情が高く保たれているのは, 個人や家族, 会社内という視点にとどまらず, 次世代を育むなどの社会での役割に視点が移り, 人間関係における変化に不安を抱きながらも, より広い視野で自分自身を捉えられるようになるということに一因があると考えられる。一方, これから結婚, 出産, 育児などのライフイベントを経験するであろう, または経験している最中であると考えられる20代から44歳までの若年層は, 仕事における自らの「有用性」が重要となり, それにより評価・収入の上昇につながるため, 組織内自尊感情が大きく自尊感情に影響を及ぼしていると考えられる。

本研究の限界としては, まず, 協力者の世帯収入が同年代の就業者全体の平均収入(以上)である層のみについての調査となったことが挙げられる。今後, 幅広い世帯収入層の協力を得て, 自尊感情に影響を与える要因について調査・分析する必要がある。また, 中年期の内的自己についての不安が具体的にどのようなものなのか, さらに, その不安の影響が比較的大きいにも関わらず, 自尊感情が下がらない理由や要因についても, 質的調査を含めて詳細に調査する必要があると考える。

注

- 1) 厚生労働省の「健康日本21(総論)」(2000)において, 年齢区分は, 幼年期0~4歳, 少年期5~14歳, 青年期15~24歳, 壮年期25~44歳, 中年期45~64歳, 高年期65歳以上となっている。
- 2) 本研究の65-69歳の2名(男性)は, いずれも就業者(1名は常勤, 1名は非常勤)だったため, 厚生労働省の区分では高年期に当たるが, 調査対象とさせていただいた。
- 3) 厚生労働省(2022)によると, 「世帯主の年齢階級別にみた1世帯当たり一世帯人員1人当たり平均所得金額」は次の通りとなっている。1世帯当たり平均所得金額(カッコ内は世帯人数1人当たり平均所得金額)は, 29歳以下433.1万円(261.3万円), 30-39歳636.3万円(212.9万円), 40-49歳721.2万円(228.5万円), 50-59歳782.7万円(303.7万円), 60-69歳578.8万円(247.0万円)。

引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84(2), 191.
- DeLongis, A., Folkman, S., & Lazarus, R. S. (1988). The impact of daily stress on health and mood: Psychological and social resources as mediators. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54(3), 486-495. doi:10.1037/0022-3514.54.3.486

- Erikson, E. H., Erikson, J. M., Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: Norton.
- Izard, C. E. (1972). Anxiety: A variable combination of interacting fundamental emotions. *Anxiety: Current Trends in Theory and Research*, 1, 55-106.
- Hayashi, S. (2021). Factors that affect Japanese English teachers' self-esteem. *Journal of Public Value*, 1(1), 165-176. Retrieved from; <http://scholar.dkyobobook.co.kr/searchDetail.laf?barcode=4010028387131>
- 林彰子. (2020). 日本人英語教師の自信と自尊感情の関連についての考察——教科指導についての語りからの分析. *言語文化教育研究*, 18, 123-141. doi:10.14960/gbkkg.18.123
- 上瀬由美子・下村英雄・今野裕之・堀洋元・岡本浩一. (2005). 組織における違反と職業威信. *社会技術研究論文集*. 3, 111-117.
- 厚生労働省. (2000). 「健康日本21(総論)」(https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/s0.html#A62) (2023/08/31閲覧)
- 厚生労働省. (2022). 「2021(令和3)年 国民生活基礎調査の概況」(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa21/dl/03.pdf>) (2023/08/30閲覧)
- Matsuda, Y., Pierce, J. L., Ishikawa, R. (2011). Development and validation of the Japanese version of Organization-Based Self-Esteem Scale. *Journal of Occupational Health*, 53(3), 188-196. doi:10.1539/joh.L10129
- 松田与理子・石川利江. (2012). 組織内自尊感情と従業員 well-being との関係. *ストレス科学研究*, 27, 40-48.
- 松岡弥玲. (2006). 理想自己の生涯発達: 変化の意味と調節過程を捉える. *教育心理学研究*, 54(1), 45-54.
- Ogihara, Y. (2019). A decline in self-esteem in adults over 50 is not found in Japan: Age differences in self-esteem from young adulthood to old age. *BMC Research Notes*, 12(1), 274. doi:10.1186/s13104-019-4289-x
- 岡本祐子. (2007). 『アイデンティティ生涯発達論の展開』ミネルヴァ書房
- Orth, U., Robins, R. W., & Widaman, K. F. (2012). Life-span development of self-esteem and its effects on important life outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 102(6), 1271-1288. doi:10.1037/a0025558
- 小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並川努・脇田貴文. (2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響: Rosenbergの自尊感情尺度日本語版のメタ分析. *教育心理学研究*, 62(4), 273-282. doi:10.5926/jjep.62.273
- Pierce, J. L., & Gardner, D. G. (2009). Relationships of personality and job characteristics with organization-based self-esteem. *Journal of Managerial Psychology*, 24(5), 392-409. doi:10.1108/02683940910959735
- Pierce, J. L., Gardner, D. G., Cummings, L. L., & Dunham, R. B. (1989). Organization-based self-esteem: Construct definition, measurement, and validation. *Academy of Management Journal*, 32(3), 622-648. doi:10.5465/256437
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Schmitt, D. P., & Allik, J. (2005). Simultaneous administration of the Rosenberg self-esteem scale in 53 nations: Exploring the universal and culture-specific features of global self-esteem. *Journal of*

Personality and Social Psychology, 89(4), 623.

清水裕士. (2016). フリーの統計分析ソフトhad: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

菅沼ひろ子・串間秀子・宮里和子. (2000). 更年期女性の健康実態. 日本助産学会誌, 14(1), 45-53. doi:10.3418/jjam.14.45

若本純子・無藤隆. (2004). 中年期の多次元的自己概念における発達的特徴. 教育心理学研究, 52(4), 382-391. doi:10.5926/jjep1953.52.4_382

山本真・松井豊・山成由紀子. (1982). 認知された自己の諸側面の構造. *The Japanese Journal of Educational Psychology*, 30(1), 64-68. doi:10.5926/jjep1953.30.1_64

(指導教員 遠藤利彦教授)